

演習ガイダンス(2016年度)

2016年4月8日(金)16:50~18:35

経済学研究科棟204演習室

小野塚 知 二

はじめに

(1)世界の大学卒業生の常識(と日本の大学卒業生の非常識)

歴史の有用性ないし戦略性をめぐる感覚の決定的な相違

(2)自分で課題を決めて、調べ、考え、結論を出すこと

「お勉強」と「研究」(=問題発見+課題設定+課題の解決)の相違

(3)口頭発表および論文執筆の説得的な技法と能力

初等から高等までの日本の学校教育の最大の弱点の一つ。要するに相手に何を伝えたいか、相手から何を聞き出したいかということ。それに比べれば、英語力とか数学/統計学を使いこなす力とかは枝葉末節の、いわば単なる手段の問題。

I 今年度のテーマ「成長戦略の動態的歴史 —効果と副作用—」について

演習参加者募集要項に記載されているとおりです。詳細は、開講時(4月22日)に案内します。

「成長戦略の動態的歴史」というテーマは初めて取り上げますが、このテーマの概略の一部は、東大EMPの同窓会誌『EMPower』第8号のインタビューで話し^{*1}、また、『国際武器移転史』誌の創刊号にも2015年の日本を経済史研究者としてどうみるのかという試論を載せましたので^{*2}、それぞれ参照してください。

簡単にいうなら、アベノミクスの破綻がますます明瞭になっている現状で、以下の三点を経済史の知見を用いて問おうということです。①成長戦略はどのような動態的な過程を経て、効果を発揮し、効果を失い、また副作用をもたらしてきたのか。殊に、アベノミクスはなぜ、また、いかにして失敗しているのか。②成長戦略の二つの型(投資主導型と消費・生活主導型)はどのようにして交替・転換したか。③そもそも、「成長」とは何か、なにゆえ必要なのか。「成長」に限界はないのか、「定常状態」への安定的な転換を目指すべきではないのか。

「成長戦略」とは現在の「アベノミクス」が最初ではないし、過去にさまざまに試みられた成長戦略の効果も千差万別であり、またそこには思わぬ副作用も必ず付随します。それゆえ、望ましい成長戦略が一義的に明瞭に定まるわけではなく、常に、政策効果の遅速/持続性や副作用との関係で評価されなければなりません。さらに決定的には、政策とは政策目的(つまり共有された価値観・思想・宗教に裏付けられた目標)を実現するための合理的な手段であるか否かという観点から論じられなければならないと同時に、政策とは客観

*1 http://emp-office.sakura.ne.jp/tmp/file/EMPowerVol8_Final_Web.pdf

*2 <http://www.kisc.meiji.ac.jp/~transfer/paper/> なお、この拙稿は5月6日の導入の際の素材にします。

的な条件の中で施行されますから、「生産性を高めて、モノを作って、輸出する」という旧来の発想の有効性そのものが再検討されなければなりません。政策目的の適切さと、政策手段と政策環境との適合性が、現在の政府と財界には見えなくなっているのではないかという疑いを検証するのが、今年度のテーマの眼目です。それらを通じて歴史をおのれの武器として使いこなす力を養うことにしましょう(はじめに(1))。

II ゼミと卒論について

せっかく進学しても、講義に出ているだけでは経済学部で自分が何を学んだのかは、卒業して半年もしないうちにほとんど忘れてしまうでしょう。ゼミで討論し、ご自分でテーマを決めて研究し、卒業論文に書いたことは、自分の財産としてあとまで残ります。卒業後に勉強の効果が残るかどうかという点だけでなく、就職活動の際にも自分でテーマを決めて研究しているということが非常に高く評価された例を最近いくつも耳にしています。経済学部や法学部のように多人数講義が主体の教育を行っているところでは、ゼミで個人研究を進め、卒論を書かなかつたら、大学で学んだ証しを残すのは非常に難しいのです*3。

ぜひ、おもしろい卒論を執筆することを今後2年間の目標の一つに設定してください。そのために必要な助言と指導は必ずゼミで得られます。自力で何かを調べ、その成果を論理的に表現して、口頭で、また文章で発表するという技法は学生時代に身に付けておけば、どの進路を選んでも非常に役に立ちます。

ゼミについてのわたしの考えは、かつて、以下のインタビューで詳細に述べましたので、参考にしてください。「新しい大学選び」第3回(洋々・大学別キャンパスライフ、2009年3月)¹⁴

III 個人研究のテーマ選定について

個人研究のテーマは、今年度の演習のテーマに縛られる必要はありません。ご自分の関心のある、研究してみたいテーマを選んでください。ただ、テーマによって、研究のしやすさ／難しさが違います。卒論提出までの20ヶ月ほどで、成果が出せないと困りますから、どんなテーマでも研究できるというわけではありません。テーマを選ぶ際は、まず、関心のあることがらをいくつか、テーマの候補として挙げて、わたしにご相談ください。5月から6月のうちに、とりあえずのテーマを決めてください。その最初の研究成果を秋の合宿で発表してもらい、そこで出された疑問や助言を活かして、冬学期の個人研究報告へ、さらに年度末の小論文(4年次から入る人は卒業論文)に繋げてください。

昨年度の卒論のテーマ、実際のゼミの雰囲気、合宿等については新4年生の諸君にうかがってください。

*3 これは、東大経済学部卒業生のかなりの部分は東大法学部卒業生より優秀ではないかとわたしが考えている根拠で、伊賀泰代氏が『採用基準』(ダイヤモンド社、2012年)の第1章コラムで論じているのとは少し異なりますが、自力で何かを成し遂げる経験の有無という点では通底するところもあるでしょう。

*4 <http://you2.jp/ao/course-03.htm>